



## 高田 裕美さん

[書体デザイナー]

「UD デジタル教科書体」は、ロービジョン（低視力や視野欠損など視覚により日常生活を送る上で支障がある状態）やディスレクシア（視覚・聴覚・知的に問題がなく、脳・神経由来の原因で読み書きに著しい困難がある状態）の子どもたちにも配慮された書体（フォント）です。この書体の産みの親、書体デザイナーの高田裕美さんにお話をうかがいました。

※このページの本文は「UD デジタル教科書体」で作成しています。

### 時間はかかったけれど 待っていてくれる人の 期待に応えたかった

UD デジタル教科書体の開発は、ロービジョンの子どもたちが教室で学ぶ姿を見せて頂いたことに始まります。そこでは先生が、既成の書体を漢字配当表に沿った形になるよう、ホワイトペンで修正して教えているのを知りました。「この子たちが学ぶための書体が世の中にはない」。そんな困難な状況に衝撃を受け、私は「この書体を必ず世に出したい」と強く思いました。

ですが、リリースまでの間、会社の吸収合併や開発の一時中断など、様々なことがありました。そのため一般的には2～3年の開発期間で終わるところ、8年を要しました。

UD デジタル教科書体は、誕生を待っていてくれる人がたくさんいました。「あったら嬉しい、助かる」という期待に何とか応えたくて、「ここで止められない」という使命感をもち続けて取り組んできました。

私は自分の好きなこと、やりたいことを、職場でもとことん突き詰めるタイプ。ウラを返せば、自分が納得することしかできない人間です。

だけど、単に自分がやりたいだけのものだったら、ここまで必死にはできなかったかもしれません。

### 好きなことをのびのびと学んでいた 子ども時代

当時、母は保育士、父はプラネタリウムを発明した会社勤めを経て、小中学校の用務員をしていました。共働きで、どちらかといえば母のほうが忙しく、PTAの会合には父が参加していました。

父は仕事柄星に詳しく、よく一緒に道端に仰向けに寝転んでは星座を教えてくださいました。小学校では天文部に入り、夜の屋上で天体観測したり、先生に太陽が燃える様子を見せてもらったりしたことを覚えています。

父は子どもを否定せず、自分で興味をもってやろうとしたことをいつも応援してくれる人でした。私は小さい頃から学ぶことが好きで、まだ学校で習ってない漢字を独学で間違えて覚えてしまって、先生に叱られたことがありました。私は大好きな先生に叱られたショックで、自分で学ぶことをやめて先生の宿題をやるだけのほうが良いのかと父に相談しました。父は「先に自分で学ぶことがいけないのではなく、間違いがあれば正しく教えるのが先生の仕事。叱る先生が間違いで、先生だって大人だって正しいとは限らないよ」と、私の好奇心と自己肯定感を守ってくれました。

### 子どもが自分に合うやり方を 自分で選ぶ時代が来る

デジタル化が進む中、私は子どもたち自らが自分に合った学びの方法を選ぶ時代が近い将来、来るのではないかと考えています。それは障害の有無に関係なく、全ての子どもたちに対して当てはまります。

例えば、ルビの付け方。外国生まれで日本語を初めて学ぶ子どもなら、教科書は総ルビが読みやすいでしょう。一方で、読書が得意な子どもは、初出だけのルビ表示でいいかもしれません。デジタル教科書なら「もうちょっと字が大きいほうがいい」「行と行の間を離したほうが読みやすい」など、技術的には、それぞれの子どもたちが学びやすい状態を自分で選んで個別最適化できます。そういった環境が整えば、先生も基本的な操作だけを教え、子どもに任せることができそうですね。

教えられた通りのことをこなすだけでは、子どもは自分で考えることを止めてしまいます。その結果、自分で選べない子、失敗を恐れる子になってしまう。主体性や自己肯定感が失われるからです。

子どもたちが自ら考え、選び、自分で行動するなかで、自己肯定感を育てほしい。デジタル教材は、その一助になるかと思います。

#### PROFILE

たかた・ゆみ ● 女子美術大学短期大学グラフィックデザイン科卒業後、ビットマップフォントの草分けである林隆男氏が設立した株式会社タイプバンクに入社。32年間、書体デザイナーとしてさまざまな分野のフォントの企画・制作を手掛ける。2017年、モリサワ社に吸収合併後、書体の重要性や役割を普及すべく、教育現場と共にUDフォントを活用した教材配信、講演やワークショップ、教育系の雑誌や学会誌への執筆、取材対応など広く活動中。23年に初の著書「奇跡のフォント」を時事通信社より出版。

## 「自分で選んでやってみる」が可能な デジタル教材に期待すること